

■キーワード

難聴 種類

難聴とは、聴力が低下し音が聞こえにくい状態のことですが、耳のどの部位に原因があるかで種類が分かります。

種類により、症状や対策が異なるので、現状の把握や今後の対応のためにも知っておいたほうが良いでしょう。

今回は、難聴の種類について紹介します。

1.難聴の種類

難聴は大きく分けると伝音難聴と感音難聴があります。それぞれの種類によって聞こえ方が違ってきます。

1.1.伝音難聴

伝音難聴は基本的に外耳と中耳に関係する難聴です。全体の20~30%を占めますが、この場を脳に伝える内耳が健在なので、対処法が比較的に見つけやすいです。

病気が原因でない典型的な例は耳垢のつまりです。耳鼻咽喉科でとってもらったら、良く聞こえるようになることもあります。

1.1.1.症状

中耳の感染症(中耳炎)、良性腫瘍(真珠腫)、鼓膜の損傷(鼓膜穿孔)、外傷、中耳・外耳奇形などの原因で、音が外耳・中耳を通して内耳に到達することが妨害されるために起こります。

ちょうど耳をふさいだ時のように、音が聞こえます。また、あまり騒がしくない場所で大きな声で話しかけられれば、内容を聴き取れることが多いという傾向があります。

1.1.2.対処法

まず、耳鼻咽喉科に行って、外耳や中耳の状況を診察してもらいましょう。病気に関連することが原因の場合は治療が必要になります。

耳垢のつまりが原因の場合は耳垢を取ってもらいます。病気治療および耳垢除去以外では、

補聴器が役に立ちます。

正常に機能していない外耳や中耳を介さず、頭がい骨を通じて、音の振動を内耳に伝える B a h a 骨導聴力活用型インプラント システム（骨固定型補聴器）もあります。

1.2.感音難聴

感音難聴は内耳に原因のある難聴で、全体の 60~70%を占めています。さらに、加齢性の難聴は過半数が感音難聴になります。

聞こえで一番大切な言葉の明瞭度が下がったり、聞こえの幅場が狭くなったりします。補聴器を一番必要とする難聴でもあります。

1.2.1.症状

難聴の過半数は感音難聴ですから様々な症状が発生します。例を挙げると次のようになります。いくつかが該当すると感音難聴と言えます。

- 家族や友人と話をしていると、時に聞き返すことがある
- TV やラジオの音が大きいと言われたことがある
- 騒がしいところで会話が聞き取りにくいことがある
- 後ろから呼びかけられても気が付かないことがある
- 大勢で会話をするのが難しいと感じることがある
- 病院や銀行で名前を呼ばれても気が付かないことがある
- 聞き間違いが多い
- 正面で話していてもうまく聞き取れないことがある
- 自動車の走る音に気が付かないことがある
- 電話で話すことがかなり難しい
- 話し声が大きいと言われる
- 集会や会議でうまく聞き取れない
- ドアのチャイムが聞こえにくい
- 話し相手の言ったことを推測で判断しがちである
- 耳元で話されても聞こえない
- 電話の呼び出し音が聞こえない

1.2.2.対処法

耳鼻咽喉科医にも相談したうえで、補聴器の装用を検討してください。

自宅から余り遠くなく、懇切丁寧な対応をしてくれる販売店で補聴器を購入し、納得の行く調整をしてもらうことが重要です。

また、重度の聞こえの場合は、補聴器で対処できない場合も出てきますので、その時は人工内耳をお勧めすることもあります。

1.3 混合性難聴

混合性難聴の方々はそれほど多くはありません。まず、伝音難聴の対策を取ったうえで、感音難聴に対する対策を取っていく方法が通常です。

1.3.1.症状

伝音難聴と感音難聴が共存している難聴なので両方の特徴が症状として現れます。

1.3.2 対処法

まず耳鼻咽喉科で伝音難聴の原因を調べ、病気に起因するのであれば、治療を施したうえで、感音難聴に対処するため補聴器を装用することになります。

2.難聴3タイプの比較表

3つ難聴は聴力を測るときに気導値と骨導値で調べます。

以下はそれぞれの特徴を表しています。

	感音難聴	伝音難聴	混合性難聴
気導値	悪い	悪い	悪い
骨導値	悪い	正常	部分的に悪い

3.難聴の程度

一般的には以下のように分類されています。

■平均聴力レベル

正常	25 dB未満
----	---------

軽度難聴	25 dB以上～40 dB未満
中等度難聴	40 dB以上～70 dB未満
高度難聴	70 dB以上～90 dB未満
重度難聴	90 dB以上

(平均難聴レベルは500, 1000, 2000, 4000 Hzにおける聴力値を足して4で割った数字です。)

4.まとめ

難聴には3つのタイプがありますが、伝音難聴は外耳と中耳の障害、感音難聴は内耳の障害、混合性難聴は伝音難聴と感音難聴が混ざっている状態です。

いずれも、聞こえが悪くなったら、まず耳鼻咽喉科に行き、どのタイプなのか調べてもらいましょう。